

おおよまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成18年
9月号

毎月23日発行
通巻433号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成18年9月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷 監製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



「一期一会」年に1、2度の現象という高知宿毛湾のダルマ夕日 奈良市 和田 保さん撮影

昭和37年9月23日 月次祭法話より

日常生活における宗教的訓練

法主 矢追 日聖 (満51歳)

本来の彼岸とは

お彼岸になってまいりましたのに、ずい分暑うございます。皆さん、どうぞ楽しんで下さい。

毎月二十三日は、大倭の月次祭でございます。九月の今日はちょうど秋分の日にあたり、世間ではお彼岸の中日ということになっております。

お彼岸の日の行事というものは、長年の習慣上、先祖さんを思い出すとか、回向供養することということで、親しまれてきております。

しかし彼岸の中日であるから思い出したように寺やお墓に参ろうということではなく、宗教的訓練というものは、日常生活の中に常に持たなければならぬ問題です。

本来の彼岸とは、一人ひとりが自分で修養し、宗教的に一つの悟りを開くということですが、仏教のことは細かく知りませんが、到彼岸(ちよひがは)と言ひまして、あちらの岸につくということをお説いています。

自分達が住まいしておる比の岸は、所謂煩惱の世界だ。川を挟み、向かい側すなわち彼岸が菩提の岸である。極楽浄土というものは、川の向こう側にある。だから我々は思い切つて、向こうを向いて川を渡る。その川を渡るには船が要る。その渡し舟(にせうふね)を如渡得船(にごとくわたりがたふね)の船と言ひますが、その船がすなわち仏教であり、釈尊の教えである。その船に乗つて渡ればよいという例えですね。

日々の現実問題からみますと、およそ縁の遠いような話ではありますが、これは悟りの意味についてのお話です。

我々は苦の毒(=苦しみ)。※漢和辞典 仏教用語辞典にある苦毒という言葉に相当するのでないかと解釈した)の世界に生きています。凡人だから煩惱がある。しかしその悩みや苦しみを考え直しひっくり返して、菩提の世界、仏の世界、悟りの世界、そういう極楽の世界のような気持ちに切り替える。煩惱即菩提、凡夫即仏身ということを教えてください。

自分の迷いや悩みを解消して悟った人間になれるということ。仏教を信じその教えどおりに、我々が悟れば、瞬時にして煩惱というものが消え去り、菩提の世界において楽しめるのだ。この苦の毒の世界も極楽浄土のようになるんだ。だから思い切って向こうの岸へ行かなければいけないと、般若心経などが説いています。

般若心経は最後に、羯諦羯諦波羅羯諦と梵語で書いています。それは、「向こうへ行け、向こうへ行きなさい」ということです。ただ「行け」と言っても、釈尊の言われたのは、本当は簡単な意味ではない。凡人では解釈できないような、複雑な意味を含んでいるのですが、それは訳さないで羯諦羯諦と梵語のまま使ってるんですね。

暑い夏がすみ、秋から冬になつていく季節の変わり目に、衣替えするように、私たち人間の心も変えていき、一つ一つ悟り、人間的に向上していく意味において、宗教的な雰囲気や社会的に作ってきたんですね。彼岸会の行事というものはそういうところから起こってきておられます。

日本民族が生活の中の重要なものとして取り入れてきた習慣となっており、これは、まことに結構なこととさせていただきます。

皆さん方はこうしてただいま、大倭の宗教的な環境の中に居られます。そのことが、自分の人生において、例えわずかでも何かプラスになるものがあれば、今日ここへおいでになった意味があるのです。

宗教に疑いを持つ

しかしながら、盲目的に一つの宗教に入り信仰することは、はなはだ危険であります。宗教には疑いを持たなければいけません。口幅つたい言いかもかもしれませんが、私には宗教的な環境に入つて三十年からの経験をつみ、宗教の内側から見る目があります。

現在世の中に活発に広がつておる多くの宗教家や宗教団体のあり方を、そうした良心的な目で見つた場合、宗教を手段として金を儲け、企業として発展させていくことに重点を置いておるような宗教があまりにも多すぎます。

宗教ということをお走つていますから、なるほど為になる良いことを教えているようですが、真面目なことも言わなければ人が寄つてこないからです。これは信者を集める方便です。

信者を自分たち企業のお得意さんであるかのようにならなくて、寄付やお賽銭を集めては大きな坊もあちらこちらにたくさん建てます。そしてその宗教の教師は、上を向いて高いところに座り、社会的には優越感を持ち、宗教家らしい顔をして世渡りしておる。皆さん方もありがたいからと目を瞑つて信者になりますと、とんでもない邪道に入ることになります。目を開かなければなりません。

いかなる宗教に対しても一応は疑いを持つ。要するに否定から入っていく。しかし相手が本物であれば、本当に真面目な本質的な宗教であれば、

いかに疑つても否定してかかつて、疑うことのできないところにぶつかるはず。そうしたときに疑いきれなくなれば、そこで初めて信じたいんです。それから信一念。信じる世界に自分を持つていき信仰して宜しいんです。

けれど自分が信じるまでの間は徹頭徹尾、疑いを持つて考えなければなりません。

幸福を求めて宗教に入ったのに、あべこべに不幸が生じてくるという結果が数多くあります。

宗教でもって教師になり、人を指導しておるような人達が、果たして信仰や宗教を自分の生活の中に生かしておるのかは、その人達の個人の家庭を見たらよく表れていると私は思います。信者の前では、立派なことを述べていますが、自分自身のことになれば、俗人よりもまだ劣等な生活をしておる人が、世の中にザラにあります。

宗教なんかで身を立てていこうというような、悪く言えば神さんで飯を食おうと考える入つていく中年ぐらいの人も多々います。始めから宗教の先生や神がかりや拝み屋とか、そんな者になる人は、信者から賽銭をたつぷり集め、それで飯食おう、遊んで口先三寸で人をちよろまかし、人から先生先生とおだててもらい威張りたいたいような人間です。一番劣等な精神の持ち主ですよ。

口だけは誰でも立派なことを言うんです。けれども迂闊にそんなところに入つて行けば、ええ力モがかかりよつたということになり、終いにはしぼり取られてしまふ。

言い換えればどの宗教でも、お賽銭をたくさん持つてくる信者は大事にします。めったに玄關であしらわず、奥へ通して大きな座布団を出し、実に待遇がよろしい。けれども裏長屋に住まいして、子供の手をひき背中に赤ん坊を泣かし、「神さん明日から私はどうなりますか」と相談に行け

ば、たいてい玄關払いが多いんです。

宗教家が助けを求めに来ている人間から、信者として金をとり、自分が生活するというになれば、それはもう邪道ですよ。悪魔の存在です。

宗教というものは物質的にもあるいは精神的にも人を強くし、どこまでも人を救済するためにあります。

世の中、警察でも裁判所でもどないにもならん、親類が寄つてもどうもならん、とにかくどうあつてもしようがない、この悩みを一体、どこに持つて行こうかというような現実問題は、日常生活において必ず起こつてくるんです。

そのときに最も信頼でき安心してものが言え、その人の言うことであれば無条件に受け入れられるという、絶対的な相談相手がこの社会に必要ななつてくる。

そういう対象になるのが宗教家の道です。そこに宗教家というものの価値があります。どんな悩みであろうとも、その悩みを受けとめ、悩みを分かち合い、お互いに善処していくように真心でもつて相談にのる人が、この世の中になれば、社会の安定というものはあります。政治や経済や法律だけで社会の安定は決して保証されないのです。

宗教家に対して人に言えない悩みをぶちまけ、その悩みを自分で解消していくところに、大きな救いがあるんですね。宗教家はそういう立場におかれておるはずなんです。

救済されて、宗教的にも導かれて喜びを持った人達が寄り集まります。そこで心を同じくする者が、同じ一つの道に集まるのだからと、本当の良さの味が分かつて、休憩する場所や話を聞くお堂も建てようかと盛り上がり、皆の真心で堂塔伽藍を作ることもあるでしょう。

そうした順序を持つて出来た場合に、この建物は生きています。これは自然に出来上がったものであつて、非常に結構なんです。

そして、できた建物は個人のものではなく、社会の皆が利用する建物です。

けれども最近の宗教は、色々なお堂や教会を建てておりますけれども、それは各末端教会や信者に割り付け、否応なしに心のない人にまで寄付を募つて建てたものです。そんなことをやりたいところが、宗教と言うよりは企業であるということですよ。

仮に立派な殿堂が出来上がったとしてもそれは死んでいきます。魂がありません。宗教というものを忘れてしまい、大きな堂を見て、あの神さんは結構だからえらい堂が建つたと、その建物やお堂の外観に気をとられて、ありがたいとアホな人が寄つてくるんですね。

だから上つ面だけの人間が、世の中いかに多いかということが分かります。その裏を見抜くことが出来ず、ただ上つすべりな人間が世の中に多い。それがためにあべこべに、そういう人間を食い物にし利用するという賢いやつが出てくる。これが今流行つている宗教家ですね。

宗教というのは形のみに捉われてはいけません。皆さんも気を配り、いかなる宗教であろうとも、やはり目を開けてまず疑うところから入つていくことです。疑いから入つていき、どうしても疑うことが出来ないということになれば、信じるよりほかに道がない。そうなれば誠心誠意信じたらよろしい。

宗教は自己修養への道

皆さん方もただ大倭へ足を運べば、ご利益ある

とか大倭の神さんは病氣治してくれるとか、目の利益に捉われるようなことでは本当の幸福はつかめません。人間は病氣もすれば、必ず死ぬという日もあるのです。自分が神さんのところにお参りに来て、たまたま病氣が治つたとしても、やはり不養生すれば病氣が起ります。

病氣が治つたから神さんありがたい、というよなことを考える人間が世の中に多いがために、その気持ちを逆に利用され、それで飯を食おうという人達が出てくるんですね。そこは皆さん方もよく気をつけなければいけない。

しかし我々人間の生活の中には悩み、迷いがあり、ただ頭でもつて悟つても、なかなか割り切れないような事態に直面することが多い。これはまあ仕方がない。

誰だつて窮したとき、あるいは自分ごととん行き詰つたときには、救いの神はないものかと、人間以外の何かに縋り付きたくなるのが、人間としての本能であり弱みです。

けれどもここで信念というものが重要です。ものの例えですが、今年一年、去年より年が老け白髪が一本増えてきたというような、現実問題で悩んでおつても、しょうがない。出来た事は結果論です。これはどれだけ嘆き足掻いても、元の通りにはなりません。

言うてる間にまた二つ三つ年老い、しまいに墓場へ連れて行かれます。肉体すらそうして墓の穴へ一年一年近づいていくのですから、ましてや生活の中においても、社会の問題においても、刻々に変化の歴史を辿つていきます。同じ状態では絶対ありえません。

そのことを各自が自覚するならば、年をとり墓場に近づいてもさほど気にはならない。百年千年も生きると思つているから、金の亡者になり、くだ

らんことで喧嘩をするのです。

いつか死ぬことは、いかなる人間も踏む道です。そのことを悟つてしまえば、自分が死ぬことを分かっておつてもさほど苦にならないんです。

それ以外の日々の生活のことにおいても、自分達が悟れば、さほど苦にならなくなるんです。だから、大倭の宗教は、人間として一歩でも向上していくことだと、いつも皆さん方に言うのです。

この修養する第一歩というものは、やはり一番先に自己修養ということです。

自分で修養するにも、目標がなければできません。目標を言えば、第一番に、世間のいかなる人にも、あの人はええ人だなと好かれるような人間に、自分自身がなるといことです。そうなるように努めるということですよ。

自分がどういう心持ちで、どういう行いをすれば、誰にでも好かれるような人間になるだろうかという目標に向かって、まず日々の修養を怠らなようにやってほしいと思います。

それだけでも出来れば、宗教への入り口はゆつくりと入っていきます。それだけで十分なんです。

宗教には奥があり、いつまでたつても到達しない深さがあります。しかしまず第一歩として自分がどんな立場におつても、皆に好かれ、あれはええ人だなと言われるような人間に自分からなっていく。人のことは言わないで、自分からなっていくように、自分で心かけをすることですね。そうなればもう、仏さんも神さんもやかましく言う必要ないんです。

自分の我というものをだんだんと放ち、心の力をすずり減らし丸くしていくと、どんな人に対しても差別的な気持ちであたらず、人間はみな平等であるという気持ちで人にも接していくことができます。そして偉い人にベコベコし自分より下の

人にいばりくさるとか、人の顔を見て物を言うような卑怯な心も起こつてこないはずですよ。これは全く三つ子に説教するような話です。しかし口でこそ簡単に申しますが、いざ実行してみいと言われたときには、なかなか難しい。

まず皆さん方には朝、神さんに手を合わせたときに、自分というものを振り返つてほしいのです。自分の環境、年齢に応じた考え方で、自分の生き方、日々の生活の仕方というものを自己反省するということですね。

陰陽合法の柏手の音

神さんに手を合わせるということは、右手がお父さん、左手はお母さんだとすると、この二つが接し合わせたところに音という子供が出てくる。

これは陰陽合法の神様の声です。この手を合わせるということとは、陰と陽を一緒にするということです。この音（パンパンと柏手の音）にはもうすでに神さんが生まれているのです。

何億年前からの古い地球の歴史が、ただ一瞬の陰陽合法の柏手のこの音の中に、全部含まれておるんですね。地球から始まり人類からすべてのものを作り出してきた、大宇宙の親神様の動き、心というものが、この柏手の中に全部納まってあります。だから年中いつも、我々の身体も、大宇宙の親神様というものに守っていただいているということです。

この世は不思議で一杯だ

埼玉県秩父郡影森村という所に生まれ、野山を駆け回つた子ども時代だった。貧しい生活には地域の助け合いがあり、食べ物も乏しくても心は何

我々は天地自然の動き、言い換えれば天地自然の心に、自分の心を通じるように信仰していくことです。大自然に沿うた人間になり、どんな人にも好かれるような人格圓滿な自分を作り上げていくことが、信仰の第一条件ですよ。

例えて言うなら、天から充滿しているこの空気というものは我々がどれだけ吸うてもかまわないし、またこの鏡池の水を掬いたいと思えば、いくらでも自由に掬つてもかまいません。けれども、それには度というものがありませんし、また掬うには水の漏らない器がなければいけませんよ。

家庭円満にしてほしい、金も儲けさせて欲しい、病氣も治して欲しいというような、自分の度も器を忘れた現世利益の願いは、神様にも仏様にも通じません。欲の深い人間が、通じたとただ勝手に思うておるだけです。

自分達が幸福になるには、自分から改めなければならぬということですよ。

やはり自己反省していくことが、大事だろうと思います。宗教は自己反省、外部に促われない自分というものを考え直すことが、一番大事なことです。

今日はお彼岸の仏教的な行事が多い時でございますから、仏教に因んだ話になりましたが、皆さんも常に自分というものを考え、目の開いた信仰をしてほしいと思います。

今日はこの辺で終わりますが、どうか剛情な信仰をされますように。
(文責 編集部)

こもれる魂の地を訪ねて (第26回)

熊本県水俣市 たかくら 敦子

不足なく満ち足りた日々だった。

何といつても山がどっかりとあつて川が流れていることが安心の源、その中心は秩父のシンボル

武甲山（1295m、正しくは1336m）。伝承によれば、日本武尊が東征の折にこの山に登って戦勝を祈願し、武具甲冑を岩蔵に納めたのが名前の由来であると言われているが、古くは「秩父嶽」「武光山」と呼ばれる神体山であった。

石灰岩でできているため、セメントの原料として山肌を激しく削られる運命を余儀なくされてきたが、「大丈夫、そんな簡単に消えてなくなりはない」と、人々は事あるごとに「山の神」を祀り、安全を祈願し、共存の道を歩んできたのである。

しかし、高度経済成長に伴って開発は急速に思わぬ方向に進む。企業に買収され、あつという間にその山容を大きく変貌させられる日の来る事を、誰が一体想像しただろうか？ ましてや山頂のイワクラを爆破する日の来る事を……。

そう、私たちは一万年、二万年という気の長さで生きていた。父は毎日この山で働き、私は遊び、自然の豊かさや信仰心に育まれている事を誇らしく思っていた。未来永劫変わらぬ平和があると、信じて疑わぬ幸せがそこにはあった。至る所小さき神々の踊る庭、その神聖なる大地で歌を歌わぬ日はなく、森に入れば神祕の静寂、風が吹けば心が騒いだ。

東の間の経済のために切り売りされ、その尊厳を奪われても黙って横たわる武甲山。与えるだけ与えてすっかり骨になってしまったその姿と共に、私の彷徨いが始まった。十八歳で家を出て、東京での暮らしは馴染まなかった。時々倒れて連れ戻されるが、山を歩くと治ってしまう。二十三歳で見切りをつけて秩父に戻ると、待っていたように縄文の遺跡発掘調査や民具の実測の仕事を与えら

れた。野山を駆け回れることの嬉しさと同時に巡ってきたのが武甲山頂遺跡調査。発掘と測量が終われば発破で飛ばされる運命にある古代の祭祀場。やがてユンボがやって来て崩され細かく砕かれ砂利となってダンブに乗せられて行く。

毎日現場に立ちながら、仕事の意味を考えた。自分が一体何をしているのか、その答えが見つからない。悲しみが勝り「秩父を出る」と決意した二十六歳の夏、南に向かつて旅に出た。

今思えば大きな計らい、水俣に辿り着いて助けられ、この地で暮らそうと決めた。水俣の困難に直面すればするほど、「人は何をもって救済されるのか？」疑問が次々と湧いてくる。狂いながら求めたのは「いつか皆で心から笑える日の来る事」。水俣が変われば秩父も変わると信じたかった。

いつも何かが重くのしかかり、命の輪が作れない。そんな時ふと「奈良に行きたい！」と思うのだったが、そう簡単にはいかなかった。試みても連れ戻される、不思議といえど不思議、この世は不思議が一杯なのだ。それから十二年も掛かって一九九二年の夏のこと、野草塾への参加が叶い、晴れて大倭紫陽花邑へと風に乗って飛んでいった。

昨日の事のように思い出す。法主さんは待っていて下さった。八月四日の朝八時、拝殿にて初めてのご対面、やにわに「あんたんとこお山があるやろう」と言われるので、直ぐに「武甲山」とお

られた。即座に法主さんが鎮めて下さる。まさかこんな事になるとは思ってもみなかった、再び秩父と結ばれる事の喜びを何としよう。

秩父坊さんを水俣にお連れして帰ることにになり、以後私のお給仕が始まった。さりげなくも余りにも深い縁。 「あんたはあんたのままでおつてええんやで」

「あんたのしたいようにしとつたらええんやわ」とはこれまで誰の口からも聴く事のできなかった言葉、法主さんからの温かい響きを全身で感じ、やっと私は縛りから解かれたと感じた。見えない世界と一つになってあれから十四年。

山で修行をしたくて三峰神社に暇乞いをした祖父のことを急に思い出す。呼ばれた気がして、この八月十五日、秩父への盆帰りのついでに三峰山に行った。直ぐに異変に気がついた。参詣者のためのロープウェイは赤字で閉鎖、バス会社が麓から直接お客さんを山頂の神社前まで運んでいる。駐車場だけが立派になつている事に愕然とした。

もう元の姿に戻れないのか？ 何があろうと昔の参道だけはつぶさないでほしい！ 雨の中、一匹の鹿が大きな角でこつちを見ている。

結局神社に用があるのではなく、その奥に連なる山々に私は行きたいのだった。「雲探 日（今は白になつている）岩 妙法ヶ嶽の三つは最も高く聳へたる峰なればとて、即ちこの山を称して三峰山とよべり」（新編武蔵風土記稿）。我らはもう行かなければならない、白いオオカミの待つあの場所に！ そして何度でも語り、蘇りたい。



そこで修行してた人があんたに会いたがって来ているわ」とあまりの速さ、しかも祖父の指導霊にあたるのと事。「お姿は？」と尋ねると「上下真っ白の装束で、髪も真っ白、肩までである」という。「秩父坊大善神」と名乗りを上げ



寸 莎

第71回

齋藤正宏さん

感性のアンテナ

今回は大倭の行事等でよく見かける齋藤正宏さんに登場してもらおう。齋藤さんはフリースクール、演劇、陶芸、自然農法、コンピュータ、写真……と実に幅広い活動をしてきた人なので、「寸莎」の枠でどれだけ紹介できるか不安である。ちなみに、この七月からは大倭安宿苑の菅原園で職員として介護に携わるといふ、齋藤さんにとっては小さくはない変化があったばかりである。

——齋藤さんは一九五九年（昭和三十四年）十二月十二日、福井市内で二人兄弟の長男として誕生した。父親は県の繊維工業試験場の技術者、母親は市立小学校の教師と、共働きの中で、同じ市内に住む母方の祖父母のところによく預けられた。

小学校時代は、「同じ学校に教師



として母親がいたので、屈折した気があったが、六年生頃から「自分は自分」と割り切りはじめていた」という記憶がある。

中学に進んでからは、「その屈折からは解放されて」、美術部に入ったり混声合唱団に誘われたりして、「それなりに楽しい日々を過ごすことができた」。ただし、高校は、北陸学園高校の理数科という進学クラスに入り、「勉強ばかりの、やや味気ない生活」を送る。

齋藤さんがブレイクしたのは、東京の国学院大学文学部日本文学科に入って二年目のことで、第三世界や日雇労働者の寄せ場である山谷なども学問の対象にしていた教育学の楠原彰氏の研究室に入入りして、そこに集まる魅力的な人々に刺激を受けるようになってからだった。

その一人が、南米の「解放の神学」の紹介者として頭角を現わしていた

山本哲士氏で、彼が主宰する全脳教育センターというフリースクールのスタッフとして、齋藤さんはその活動にのめり込んでいく。また、楠原氏らの影響を受けて日本やアジアの民衆演劇にもかわり、一九八三年には東京にアジア各国の演劇人が集まる「アジア民衆演劇祭」のスタッフとして活躍するまでに至る。

この年にはフィリピンまで足を延ばして、現地の演劇人から、「お前自身の国で、やれることをやれ」と言われたというエピソードがある。そして、「日本をもっと知りたい」と切実に思っており、「魂の地」と感じた水俣や下北半島などを旅した。

六年かかって大学を卒業してから、「今度は具体的に明快なことをやりたい」と栃木県の益子町で三年半あまり陶芸の修業を続けた。が、「陶芸は好きだったが、福井の父の病气や将来性のことを考えて」作陶は断念して、次は「農」に関心が向く。

大学時代、身近に精神的に不安定な親類がいて、「彼が立ち直るためには、農業のような自然に抱かれた環境が必要」と痛感していた。そして、『いのち』の流れに根ざした生き方をしようとする者たちの村を作ろう」と志して石川県にあった石川自然共学塾 柳原農場に参画し、無

農業 有機農業に従事する。

この農場にいた一九九二年八月に、野草塾に参加するために、はじめて大倭を訪れたが、「一日十六時間の農場での仕事で疲れ切っていて、居眠りばかりしていた」と笑う。

その後の齋藤さんの軌跡をごく簡単に記しておく、農場を三年半ほどで出た後も、京都府綾部市で「のんぼの会」という自然農法による田んぼづくりの会をはじめている。また、一九九四年には父親がパーキンソン病を発症したのを契機に郷里に戻った。博物館に勤めたり、祖父を手伝って神主を務めたり、私塾を営んだり、自宅でコンピュータの製造や修理の仕事をしたり、父親や祖父母の世話をしたり……八面六臂の働きをする。

法主様にはじめて出会った頃、齋藤さんは、「どこまで人を受け入れられるか」というテーマを抱えていた。その後、法主様との出会いの中で、「霊界を含めた理性を超えた世界も視野に入れなければ」とテーマが広がってきた。

齋藤さんは、一見、理屈で考える人に見えるが、実は彼の感性の中にある独自のアンテナに従って自分の方向を決める人であることが、今回よく分った。これからが楽しみである。（聞き手＝岸田 哲）

あじつ日記

8月13日 観会。「昼食時、急に「キョウワ センボツシャヘノ イレイノ ココロモツテ ミソギカイヲ イタセ」との法主さんの心を感じた」と杉本順一さんの話。

8月15日 大倭教立教開宣記念日で、午後2時より大倭神宮で祭典が行われました。

平山久さんの命日で今年も福田三郎 湯浅進さんが墓参に来邑して交流の家で歓談の集い。

8月21日 法主様の弟矢追隆義さん(本紙「隆家の頃の法主」の筆者)の夫人で軽費老人ホーム「大倭滝の峯荘」理事長矢追綾子さんが帰幽され、ならやま会館で23日お通夜 24日ご葬儀でした。享年83歳。

第291回 大倭会文化行事 秋の一泊旅行のご案内

—瀬戸内海・吉備路を訪ねる—
皆さん、お誘い合わせてご参加下さい。

日時：平成18年10月29日(日)～30日(月)

行き先：岡山・瀬戸内海方面

(吉備津神社・大原美術館・備前焼き窯元など)

お泊り：鷺羽ハイランドホテル

倉敷市下津井吹上303-17 tel 086-479-9500

定員：50名程度

費用：28,000円

申込み：10月10日までに代金を添えて世話人へ

世話人：湯浅芳郎 tel 0742-48-3389

090-6987-5847

この日から中村昇次さんの昼



8月26日 恒例の「弥栄おどり」は大倭会主催となつて、賑やかに開催されました。朝からお天気に恵まれ、遠方からのお手伝いもあり準備も順調。開始前に夕立に見舞われたもののお清め程度、踊りの間も盛んに雷鳴、でも差し支えなしでした。

と夕の食事を全曜日、菅原園でお世話頂くことになりました。

8月27日 無事、「弥栄おどり」の後片付けも終了しました。

8月28日 来日中のイスラエル人女性が、岸田哲さんに知人からのプレゼントを届けるため来邑して交流の家に一泊。同じ言語療法士というよしみで杉本佐都姫さんが応接の助っ人。

9月6日 大倭神宮月次祭。この日は法主様の先妻妙月かあさんのご命日でした。

夜、大倭会館で邑倭の会。

9月9日 木村聖哉 杉浩史さん始め柴地則之追悼文集『ユートピアを追いかけて』の刊行に関わった7人が、午後3時より交流の家で集まり3人は一泊。15年振りの事後処理のため。

夕方6時から大倭会館で「弥栄おどり」反省会。

第18回 大倭会文化講演会

日時：平成18年11月12日(日)

午後2時より

場所：大倭紫陽花色 拜殿

講師：木村勝男さん

タイトル「生涯青春-ただ今、大学院生」

● 講師プロフィール ●

韓国から日本に渡ってきた両親の長男として1940年に島根県で生まれた木村さんは、どん底の貧しさから出発して、逆境を糧にしなが、目を見張るような行動力と向上心で経営者としての成功をおさめられた。

現在、企業活動に取り組むと共に、大阪府立大学大学院で学んでいる。

9月10日 観会。石川県松任市の手取屋征夫さん夫妻が、ご両親(外次 ふみさん。昭和40年代の邑人)のお墓参りのついでに参加されました。

大倭安宿苑では

(菅原園)

8月24日 イトーヨーカドー出張スーパ。お菓子の他、衣料販売もして喜ばれました。

大和キリスト教会のお2人が歌やお話のボランティア。

(須加宮寮)

8月20日 奈良県文化会館での「わたぼうし音楽祭」に5名の住苑者が参加。

8月26日 弥栄おどりを30名の住苑者が楽しみました。

(長曾根寮)

8月17日 誕生会。夢田はまさんが今月108歳で、奈良市で2番目の長寿者です。

8月26日 8名の方が弥栄おどりに参加。

(八重垣園)

8月11日 なら燈花会へ夜の外出支援を実施。

8月23日 今年も頂いた鈴虫の「グリーン、リン」の声が響きます。

9月7日 奈良県施設老人福祉大会に6名の方が参加。

お陰さまで、稲は元気です。あいにく大倭町レクリエーション日と重なっています。ご都合のつく方は是非ご参加下さい。

10月9日(祝)
午前9:30~

服装
長袖・長ズボン・長靴。
帽子とタオルは各自ご用意下さい。
軍手と鎌は用意してあります。

昼食・飲み物
ご用意します。(差し入れ歓迎)

連絡先 TEL 0742-41-4615 (玄徳院)

編集後記

▼観会の後には有志で勉強会をしている。今回のテーマは「素直とは何か」。いつもはテーマから段々と外れ、問う作業が消えて周知の世界に舞戻ってしまうが、今回は二時間、気持ち切れなかった。人は何に素直になるんだらうか。(章)

あんない

* 月次祭(大倭神宮)
10月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会主催第四五五回観会
10月8日(日) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。(11月の観会は文化講演会となります)

* 月次祭(大倭神宮)
10月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

* 月次祭(大倭大本宮)
10月23日(月) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。